

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日常生活における”判断”の学習 : 「タオルがこおったばんに」 (日書・二・下)の教材を素材に
Author(s)	松原, 俊一
Citation	児童の言語生態研究 , 8 : 45 - 51
Issue Date	1977-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045092">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045092</a>
Right	
Relation	



「タオルがこおったばんに」(日書・二・下)の教材を素材に

日常生活における「判断」の学習

松原俊一

教材「タオルがこおったばんに」(日書・二・下)

おふろの帰りでした。

地めんは、かちかちにこおっていました。高い木のえだには月がかかっていて、そこから、にんじやでもとびおりてくるように思われました。

月の光のさすところは、昼間のように明るく、かげのところは黒ぐろとしくんでいました。

ぜんちゃんのタオルは、もう、ぼろのようにこおっていました。きつと、こおるだろうと思って、ほそ長くぶらさげてきたのです。

おふろでよくあたたまってきたから、ぜんちゃんはさむくありません。足音をたてて、さびしい夜道を帰っていききました。ところが、とちゅうで、ぜんちゃんはぎくっとして立ち止まりました。足もとに、白い子犬がうずくまっていたのです。

子犬は、かぼそい声で鳴いていました。耳をふさいでも通りすぎることができないほど、かなしそうな声でした。

ぜんちゃんは、思わず子犬をひろい上げました。子犬は、あかちゃんがあまえるように、少しでもふかく、ぜんちゃんのうちの中へもぐりこもうとするようでした。

ぜんちゃんは、いい気もちになりました。子犬のあたたかみが、ほかほかとむなもとへ、つたわってきました。

(だが、まてよ：：。)

子犬なんかひろって帰ったら、どういうことになるでしょう。ただ、おかあさんをこまらすだけでは

ありませんか。うちで、犬やネコをかえないことは、わかりすぎるほどわかっていたので。

(いけない、いけない)

ぜんちゃんは、なんども子犬を道ばたへすていこうと思いましたが、が、どうしても、それができません。

いきもつまりそうな、さむいばんです。子犬は、道ばたでこごえしんでしまうでしょう。

(ほくには、できない。だが、弱ったな：：)

ぜんちゃんの足が、のろのろとおもくなりました。どうしていいか、わかりません。

ふと、犬ごやが目にはいりました。よその家のげんかんわきです。ぜんちゃんは、こしをかがめて、おそるおそる、犬ごやの中をのぞいてみました。犬とわらのにおいがしました。でも、中からっぽでした。

ぜんちゃんは、わるいことでもするようになり、あたりを見回しました。どこにも人かげはありません。しんとしずまりかえっています。

ぜんちゃんは、すばやく、子犬を犬ごやのおくへおしこみました。それから、はん人のように、うちへにげ帰りました。

いつもなら、こおったタオルを、「ほうらね。」と、とくいそうにおかあさんに見せるのです。それもわすれて、ぜんちゃんはねどこにもぐりこみませんでした。

なかなか、ねつかれませんでした。

(あの犬ごやに、やさしいめす犬がいたらいいな。

あの子犬をかわいがってくれるだろう。けれど、らんぼうなおす犬だったら、子犬をいじめてお出ししてしまうだろうな：：)

心ばいで、心ばいで、ぜんちゃんはひとばんじゅう子犬のゆめを見ました。

あくる日のことです。

となりの組の子さんが、学校でなかよしをあつめて、大声で話していました。

「ゆうべね、うちの犬ごやへ、子犬がまよいこんできたのよ。まっ白な、かわいい子犬よ。ピスったら、男のくせにとつてもかわいがってるのよ。まるで自分がうんだ子犬みたいに、かわいがっているのよ。」

「わあ、すてき。その子犬を見せてくれない。」  
「見せてあげるけど、あんまりそばによると、ピスがおこるかもしれないわよ。」

速くでこの話を聞いたとき、ぜんちゃんは、どんなにおどろいたことでしょう。どんなによろこんだことでしょう。

「その子犬は、ぼくがひろって、入れておいたのだよ。」

と、のどまで出かかりましたが、ぐっとのみこみました。

「今は、いわないほうがいい。こおったタオルがとけるように、いつかわらって話をするときが来るでしょうから：：。」

(なまち さぶろう)

# 一、教材観

一判断することのための活用教材として―

「タオルがおこったばんに」の教材は、主人公・ぜんちゃんのやさしい感情によってつらぬかれた作品であると言える。しかし本作品の特徴は、「その子犬は、ぼくがひろって入れておいたんだよ」と言いたい気持ちをおさえて、「今は言わないほうがいい」と、本人の感情が処理されるところにある。

主人公・ぜんちゃんが、言いたい衝動をおさえてそれをぐっと飲みこんだのも、この場における相手（ゆり子）と自分（ぜんちゃん）、さらに子犬の立場や各々の条件を思いやったからであろう。もし仮りに「それはぼくの犬だよ」と言った場合、ゆり子さんはぜんちゃんに子犬を返してくるか、あるいは憤慨するかもしれない。かと言って子犬を返されてもぜんちゃんは家で飼うことはできない。また子犬にしてもベスと一緒に平和に暮らしているから、そのまま置いてほうが入れておいたのだよ」という発言をおさえたのは、ゆり子・ぼく・子犬の三者それぞれの立場を想定した状況の理解を深くし、それぞれの状況についての見通しをたてることによって、もっとも良いと思われる判断をくだしたことがある。

「今は言わないほうがいい」という言いかたには、ぜんちゃん自身の「いま言ったとしたら」という気持ちと聞きつけることができる。それだけに、衝動的な気持ちとは区別された判断経過を考えさせる教材といえることができる。授業はここから始めたい。

三人三様の立場を読解させることを主目的とはしない。ぜんちゃんが取り得た最良の方策、「それでいいんだ。それでよかったんだ」と自分を言いきかせているみたいなの内的葛藤のわかることを、学習の大事な内容としなければならない。この立場をとるとこのよ

うな結果になり、こっちの立場をとるとこのような結果になるという見通しを伴った状況下に追い込まれているのが「ぜんちゃん」である。ただし、「ぜんちゃん自身は自分のとった「今は、言わないほうがいい」という態度の決定を「判断」と思っているのでもなければ考えているのでもない。しかしその場の見通しや各人のそれぞれの立場・条件などを考えて、言いたい衝動をおさえ、この場におけるもっとも良いと思われる考え方に至ったことは、結果的には判断経過をたどっていることである。つまり、ぜんちゃんは知らず知らずのうちに判断したのである。

このような、ある種の状況の理解と見とおしによる態度の決定を、われわれは「判断」とも呼んでいる。どう判断しなければならぬのかを教えるのではない。「判断」とはどういうものなのかを学習させたい。つまり、ぜんちゃんの精神的内面処理である。

## 二、ぜんちゃんの精神的内面処理とは―

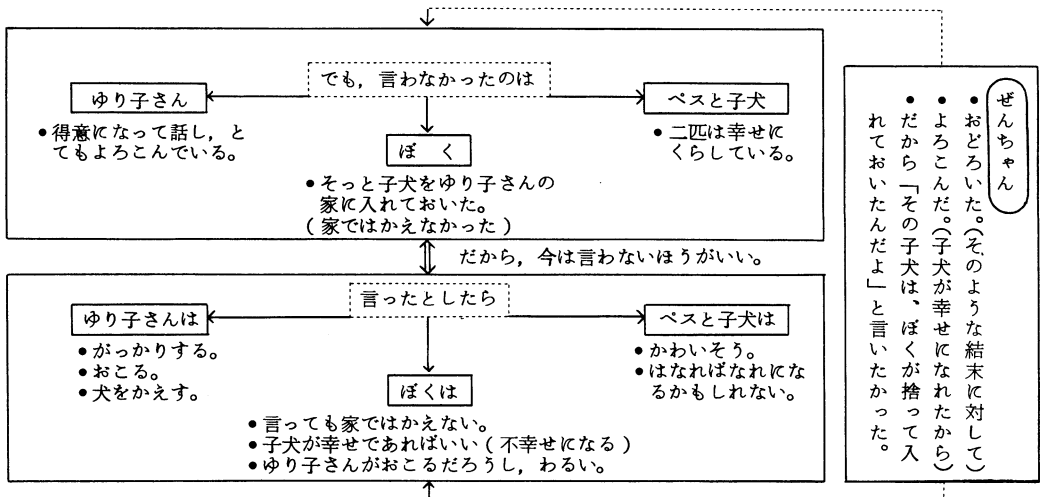
話を一読して理解されるように、ぜんちゃんのおかかっている立場は大変に苦しいものであることが理解される。

下図に見るように他人の家にそっと入れておいた子犬が、意外にも幸福な生活をおくるようになったことから受ける、ぜんちゃんのためらいがまず出る。即ち自分の行為が良い結果に至ったことを喜び当分の気持ちとして、「その子犬は、ぼくが入れておいたんだよ」と言いたい。しかし、のどまで出かかった言葉をぐっとのみこんで、「今は、言わないほうがいい」と思い至る。

のどまで出かかった。  
今は、言わないほうがいい

← 今、言わないほうがいい  
部分内容をうめるものが、ぜんちゃんの判断に至った思考内容である。つまり「のど

態度の決定に至る、ぜんちゃんの思考過程図

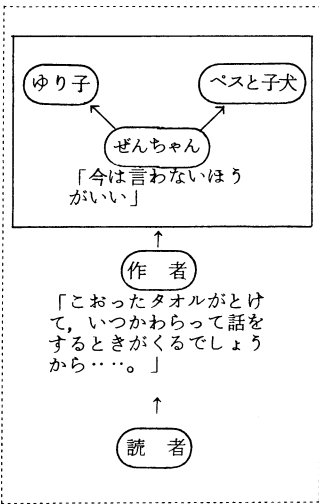


まで出なかった」言いたい衝動を制御させたのは、  
 部分においてぜんちゃんが何かを考え、その結果「今は言わないほうがいい」と決断付けたためである。そこにぜんちゃんの精神的内面処理の軌跡が見届けられる。授業では、二年生の子どもたちにぜんちゃん自身が辿ったと同じような精神処理過程を体験させたい。即ち、場の状況の理解から相手の立場・条件を考えその場における最もよいと思われる態度の決定の追体験である。

### 三、素材の教材化（教科書本文の改変）

読解指導としてこの教材を扱うのであれば、本文最後の部分の読みとりが中心となり、作者の考えを理解する内容鑑賞へと向かう学習が要求される。しかしさきに教材観の項で述べて来たように、本教材の持つ文学作品性を問うことは別である。

誰しもが思うように本作品の特色は、ぜんちゃんという子どもの行為と思いを、作者が大人の目から眺めているところにある。



右図に見るように本作品には、ぜんちゃん自身の思いと、作者がぜんちゃんに託している思いとの混合が見届けられる。それ故に本作品を原文のまま二年生の読者に読ませると、作者の思い、ぜんちゃんへのイメージ、また読者として二年生の子どもたちの描くイメージ、この三つが混同したままで受け止められる。もし読解指導をさせるのであれば、このあたりの読み解きと整理が中心となる。しかし、今はこの立場はとらない。

本授業のねらいは、ある場面の状況の理解と見通しをたてることから、ある種の状況下における態度の決定という構え方を、子どもも自身におこなわせようとするところにある。ゆえに本作品の文学性を問うことは、今は別である。したがって本作品から文学作品としての要素をばぶくことをもって、教材処理の観点とした。

第一の処理↓文題「タオルのこおったばんに」削除。  
 第二の処理↓本文中における主人公の呼称「ぜんちゃん」を「ぼく」に改変。  
 第三の処理↓本文末「こおったタオルがとけるように、いつか、わらって話をするときが来るでしょうから。」を削除。

#### △文題の削除▽

「タオルがこおったばんに」の文題は、単にタオルが凍るような寒い晩の出来事、という意味ではない。相手に告げたい衝動をおさえ、いつか氷が溶けて春が来るように笑って話しあえる日が来る。凍ったタオルがとけるように、とこの一文には、今は言わないでおこう、と思いつくというこの一文には、今は言わないの気持ち象徴されている。すなわちそこに、本作品が文学作品たり得るところがある。ただし、本作品の文学性を問うことは今は別である。また、ある状況下における場の見通しをふまえた態度の決定に至る構え方の学習と、作品の文学性とは別の問題である。ゆえに本作品の文題を削除するところから、教材処理に入っていた。

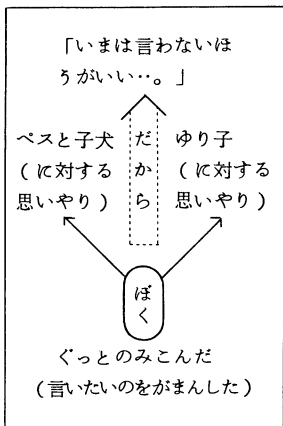
#### △ぜんちゃん「ぼく」に改変▽

本授業の意図は、主人公ぜんちゃんの気持ちや行動を読みとることではない。既述のように、主人公ぜん

ちゃんのような立場におかれたときに人間がとる態度の決定に至る構え方の体得である。そのためには、読者と作品を対応させ、作品として話の内容を読者が読みとるといふ関係ではなく、読者自身がぜんちゃんが立場に立って思考することが必要である。ぜんちゃんの思いや行動を辿るのではなく、二年生の子どもたち個々人がぜんちゃんの立場に立って思考することが要求される。それには、本文の主人公が「ぜんちゃん」であるより、「ぼく」であったほうがより達成可能である。つまり「ぼく」イコール「読者」にしようとしたのである。

△文末「こおったタオルがとけるように」以下の削除▽

文末の三行は、ぜんちゃんの思いと言うよりはむしろ作者がぜんちゃんに言いよらせている表現部分と見ている。文学作品として本作品を扱うのであれば、当然この部分の読解が中心となる。しかし今はその必要はない。「ぜんちゃん」を「ぼく」に改変し、この作品から文学的要素を省いたと同様に、文学者としての作者の立場もこの作品から除くこととした。そして、文学作品としての負担をばぶくことにより、子どもたちに作品内容を考えるより、自分自身の問題を考える場を提供しようとした。次図に見るように、それはぜんちゃんのとった行為と思いを最も追体験しやすい場の提供でもある。



※上図の「ぼく」が読者である。

四、授業の計画(全体二時間)

第一時

○心配で心配で一晩中ねむれなかったときの「ぼく」の心配についてイメージを広げる。

第二時(本時)

○「いまは言わないほうがいい」という気持ちの分析から、それが場の状況の理解および見通しをとまなっていることを整理させる。

五、本時の学習展開

○本時の目標 「いまは言わないほうがいい」という気持ちの分析から、それが場の状況の理解および見通しをとまなっていることを整理させる。

六、立場・条件・見通しを踏まえた態度の決定に至る二年生の思考過程

―授業の記録より―

(1)「判断」ということの理解度

T「今日のお勉強は「判断する」ということのお勉強です。(板書↓「判断する」)」

こんな言葉、聞いたことがありますか。」

C<sub>1</sub>「あるある。うちのお父さんがね、そこはよくはんだんしたほうがいいよ、って言っているのを聞いたことがある。」

C<sub>2</sub>「うちのお父さんもね会社の人から電話がかかってきたとき、そういうときはよくはんだんすることだね、と言っていた。」

C<sub>3</sub>「お母さんがときどき、お前は落着きがないからそこは冷静にはんだんしたほうがいいよ、とお兄ちゃんに言っていた。」

C<sub>4</sub>「聞いたことある。うちのお父さんとお母さんは、私にいつも、ちゃんとはんだんしなければだめじゃ

学習活動	指導上の留意点
<p>① 「判断」という言葉の理解度の確認</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「判断」という言葉を教えるのではない。「判断する」ということを、二年生としての程度理解しているかを、教師の側で確認するのが目的である。</li> </ul>
<p>② 場の状況の理解</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ぼく」がおどろいたり喜んだりしたことへのわけを考える。</li> <li>「ぼく」は、その犬のことをゆり子さんに言いたくなかったのかどうかについて確認する。</li> </ul>
<p>③ 場の状況の理解から見通しをたてる</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「もし言ったとしたら：」の場合についてまず考えてみる。即ち、判断に至る言動であるので、「立場」ということを理解させるために一度逆の場合をとらせてみたのである。</li> <li>見通しがはたらかなければならぬことを指導する。</li> <li>言ったとした場合について</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>「ゆり子さん」はどうなるのか：：</li> <li>「ビスと子犬」はどうなるのか：：</li> <li>「ぼく」はどうなるのか：：</li> </ul>	<p>「ゆり子」「ぼく」「ビスと子犬」のそれぞれ予想される状況について発表させる。</p>
<p>④ それぞれの立場・条件・見通しをふまえた態度の決定に至る</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ここでは「見通し」に立った態度の決定を考えさせる。</li> <li>「今は、言わないほうがいい。」</li> <li>なぜ今は言わないほうがいいのかについて三者の立場・条件を考えながらその理由について発表させる。</li> <li>「今はどうしたらいいのかわか」を今一度考えるのは、子どもたちが「ゆり子・ぼく・子犬」三者の立場・条件を総合的に目をくぼって考えさせるためである。(総合性の発見)</li> <li>時間性の発見。</li> <li>(そのことを言っていないときは、子犬が成長して、一人立ちできるときのことである)</li> </ul>
<p>⑤ 本時のまとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「立場・条件・見通し」をふまえた態度の決定が「判断」であるということ。</li> </ul>

ないの、って言うの。」

C<sub>5</sub>「テレビのニュースを聞いていたときなんだけれど、アナウンサーがその言葉を言っていたのを聞いたことがある。はんだんって、たしかめることだと思っ」

C<sub>6</sub>「勉強なんかでわかんないとき、お母さんがおこる言葉です。」

T「どんな意味かはわからないけれど、判断」という言葉と、それがどんなときに使われるかについては、何人かの人は知っているんですね。今日はその判断する」ということを、お勉強するんです。」

C<sub>7</sub>「ひえーっ。むつかしいー」

C<sub>8</sub>「わかるかなー。はんだんって。」

T「わかる、わかる。かたん、かたん。では、お話を印刷してあるプリントを出してください。お話の中の次の日のことを考えます。プリント4枚めの終りのほうに、ぼくは、どんなにおどろいたことでしょうか。どんなに、よるこんだことでしょうか」と書いてありますね。ぼくは何におどろき、何をそんなに喜んだか教えてください。」

(2)場の状況の理解

C「ぼくは子犬をひろってよその家の犬小屋に入れておいたでしょう。だからその家の犬にいじめられていては大変だなー、って心配していたの。そしてね、あくる日になって、ビスがかわいくなってくれていることがわかって、とってもうれしかったの。」

C「もしもしたら、夜中のあいだに子犬がさみしがって外へ出てしまったかな」と思っていたんです。それが学校の友達の家でかわいがってもらっていたので、うれしかったんだ。」

C「もしも、その家の犬がビスみたいにやさしい犬じゃなくて、もっといじわるで強い犬だったら大変だったから。」

T「そうじゃなかったから、うれしかったんだね。」

C「ふつうは、おす犬はあまり子犬をかわいがらないでしょう。ところがその家の犬はおす犬で、そのおす犬が小さい犬をかわいがってくれたから、ぼくは喜んだり、おどろいたりしたんです。」

T「そうだねえ。ぼくの心配がふき飛んだんだよね。すると、ぼくはゆり子さんにその犬はぼくの犬だよ。ぼくが入れておいたんだよ」と言ったんですね。」

C「言わない。」

C「言った。」

C「言わなかったんだよ。」

T「どっちなの。言ったんですか。言わなかったのですか。」

C「のどまで出かかったんだ。」

C「のどのところまで出かかったんだけど、言わなかったの。」

C「そう、そう。のどの、ここんとこまで出かかったんだけれど、そのことをみこんでしまっ言わなかったんです。」

T「言わなかったんですね。」

T「(板書)言わなかった」

T「その犬は、ぼくが入れておいたんだよ」ということを言わなかったのは、言いたくなかったからでしょう。」

C「ちがう。言いたかったんだよ。」

T「でもさ、ぼくは言わなかったんですよ。ということば、言いたくなかったんじゃないの。」

C「のどまで出かかったのを、のみこんじゃったから言いたかったけれど、言いたくなかったんだ。」

C「言いたかったんだけど、今は言わないほうがいいと思ったので言わなかったの。」

C「だからね、言いたかったけれども、言わなかったの。」

T「(板書)言いたかったけれど言わなかった」

T「ものすごく言いたかったけれど、ぼくはそのことを言わなかったのですね。」

(3)三者の立場や条件を踏まえた見とおしをたてる  
ゆり子さん」の立場の理解

C「言うよね、その女の子がせっかく喜んでいたので、やっぱりしちゃうから。」

T「女の子の名前は何と言うの。」

C「ゆり子さん。」

C「言うよね、ゆりさんが悲しんだりがっかりするかもしれないから。」

C「もしここで言うよと、ゆりさんがなーんだ。あなたが入れておいたのか」と思ってがっかりしちゃう。そして、その男の子と仲が悪くなって「えーい。あの子が入れておいたのなら捨てちゃえ」と思って子犬を捨てるかもしれないでしょう。だから言わなかったの。」

C「へんな気持ちになるの。ゆりさんが。」

T「へんな気持ちって？」

C「ゆりさんがね、そんなふうにだまっ入れておくなんて変な人ねと思って、きらわれるかもしれないの。」

T「だれがきらわれるの。」

C「ぼくがー」

C「そのことを言うよね、せっかく得意になって話しているゆりさんをはがっかりさせちゃうでしょう。なーんだ。そうだったの。だったらあんた子犬を持って行きなさい」とがっかりするでしょう。ぼくはそのときゆりさんをはがっかりさせたくなかったの。」

C「もし言うよね、ゆりさんが子犬を返してくるかもしれないでしょう。だから困るんだと思う。」

T「だれが？」 C「ぼくがー」

「ぼく」の立場の理解

T「今度ほね、もし言っちゃったらぼくはどうなるか。それを考えてください。」

C「ゆり子さんが、ぼくに子犬を返してくれても、ぼくの家は犬やねこをかってはいけないうでしよう。それだから困るの。」

C「もしね、ぼくの家がアパートだったらね、だれもいないとき、子犬がクンクン泣いたり、ガラス窓を破ったりするとおこられるでしょう。だから返されたら困るんです。」

C「それからね。お母さんにおこられるの。お母さんは犬があまり好きじゃないのよね。それだからさ、家の中をあらしまわったり、よその家の前でワンワン泣くとうるさいでしょう。だからね、その犬はぼくが入れておいたんだよ」と言えなかったの。」

C「もしそのことを言ったら、ゆり子さんが子犬を返しても、アパートではかえないんです。すると、またもとの寒い外にしなければいけないから、言わなかったの。」

C「もし残酷なお母さんだったら、あんなだめじゃないの。って、その子犬を捨てちゃう。」

C「捨てられちゃうと、子犬がクンクン泣きながらどぶの中におっこって死んじゃうの。」

T「子犬のことも考えてみましょう。」

T「ピストと子犬の立場の理解」

C「どうしてぼくが言わなかったかと言うとね、ピストがかわいそうだからです。」

T「ピストというのは子犬がかわいがつてくれているおす犬ですね。ちょっと目をつむってください。ピストと子犬が今何をしているかな。考えてください。」(ピストと子犬の様子イメージ化)

C「ピストと子犬があそんでいる。」

C「じゃれている。じゃれている。」

C「ピストがね、子犬をベロベロなめている。」

C「子犬がピストをお母さんだと思って、あとからくっついて歩いている。」

T「もしぼくがゆり子さんにその子犬はぼくが入れておいたんだよ、と言うと、ピストと子犬はどうなるの。」

C「はなればなれになるの。」

C「今は二人でくらししているんでしよう。それにピストはおす犬なんだけれど、子犬をがんばってかわいがっているんでしよう。だからもし言うると、ピストと子犬ははなればなれになってしまう。かわいそう。」

C「子犬は、はじめはお母さんがいたんです。そのお母さんと離れたら、二匹とも今は幸せになつていっているんでしよう。それなのに、そんなことを言うると、またピストと子犬は離れたらになってしまうかも知れない。」

C「せっかくピストと友達になれたのに、離れちゃうとゆり子さんもがっかりしちゃう。」

C「ピストと子犬はいっしょにくらしているし、二匹とも心もあたたかくなって幸せにくらしているから、それでいいと思っただけです。」

T「だれがそう思ったの。」

C「ぼくが。」

T「だから何も言わなかったのですね。」

C「うん。」

C「だって、せっかくピストと子犬は友達になれたのに離れたらかわいそう。」

C「今はピストにも友達ができたし、子犬にもお母さんができたし、はなればなれになるより、二匹とも仲良くくらししているから、そのままがいいの。」

C「ピストと子犬がはなればなれになると、せっかくのピストも、それからピストをかってるゆり子さんもかわいそうだから。」

T「よく考えましたね。ぼくは、その子犬はぼくがひろって入れたおいたんだよ」と言うことを、ゆり子さんに言いたかったのです。でも言えなかった。

言いたければ言えなかった。それは、もし言ってしまうと、ゆり子さん「ぼく」ピストと子犬がどうなるかを予想したからですね。そういうことを、ゆり子さん・ぼく・ピストと子犬の立場を考えて、見とおしをたてること、と言います。

板書 ↓ 立場を考える 見とおしをたてる

そうするとね、ぼくは、今ここで、どうすることが一番いいことなんだろうね。それを次に考えてください。」

(4)三者の立場や条件を踏まえた この場における態度の決定

C「だまっていれたいと思います。」

C「ゆり子さんに話して、子犬を返してもらって、犬小屋を作るときピストと遊ばせればいいの。」

T「あれえ、ぼくはゆり子さんに子犬のことを話したの?」

C「話さない!」(多数・騒然)

C「私がおね、もしぼくだったら、私がおもい言ったら、ゆり子さんを困らせることになるから言わなかったの。」(注・女の子の発言)

C「その子犬が大人になって一人前になったときに言えはいいの。」

T「では、言わないほうがいいと思う人は手をあげてください。」(挙手・多数)

「なぜ、言わないほうがいいと考えたのだろう。このときのぼくの立場に立って考えてください。」

総合性に入る C「どうせ返してもらったって、ピストもかわいそうだし、そうなるゆり子さんもがっかりしちゃう。ぼくだって夏になって窓をあけると子犬が窓からどこ

かへ行っちゃうと困ってしまうから。」

C「ゆり子さんもかわいそうだし、ビスも子犬も大変  
幸せだったのに離ればなれになり、ぼくの家でも子  
犬のために迷惑することになる。」

C「まずゆりさんが悲しむでしょう。それからぼく  
は子犬を返してもらっても困るし、ビスと子犬にし  
たって離ればなれになるから、今は言わないほうが  
いいんです。」

C「ぼくは迷惑しちゃうし、ゆりさんは悲しむしね、  
ビスと子犬はかわいそうだから言わないほうがいい  
の。」

◎「ゆりさんは、ぼくが言ったらがっかりするよね。  
そしてビスと子犬も、せっかく仲良くなったのに離  
ればなれになるとかわいそうでしょう。それにほっ  
ておくと死んじゃうから。」

T「あれ？ 何かたりないね。もう一度言っごら  
ん。」

◎「ぼくがゆりさんに言っちゃうと、ビスも子犬も  
悲しんじゃうし、ゆりさんもがっかりしちゃうか  
ら、言わないほうがいい。」

T「何か足りないね。わかる？」

◎「……」

T「ほかの人。何か足りないでしょう。わかる？」

C「ぼく、が入っていない。」

T「じゃあ、つけたして言っごらん。」

C「ぼくが今言ったら、ゆりさんは悲しむし、ビス  
と子犬も、せっかくお友達になったのに離れてしま  
う……」

T「あれ？ 入っていますか。」

C「一つたりない。たりない。(騒然)」

C「ぼく、が入っていない。」

T「ぼく、を入れて言ってください。」

C「まずね、ビスと子犬が離れてしまうと、ゆり子さ  
んが悲しむのね。それからビスも子犬がはなれてい

くのは悲しいと思うだろうし、ぼくも、子犬を返し  
てもらってもアパートに住んでいるから迷惑にな  
りましょう。道路や外においておくこともできないし  
ね。だから今は言わないほうがいいことなんだ  
と思います。」

T「そうですね。ゆりさんの立場。ビスと子犬の立  
場。それにぼくの立場。それを全部考えた上で、で  
はこの場合どうすればいいのか。それを考えたので  
すね。そして、今は言わないほうがいい、と心の中  
で決めただんですね。そういうふうに考えることを、  
判断する」と言うんです。みんなは今、判断した  
んだよ。」

C「えー。それが判断なの。」  
C「かんだーん。」(騒然)  
T「最後にもう一つ聞きます。今は言わないほうが  
いい」のなら、何時言うんだろうね。ぼくはゆり子  
さんに何時、そのことを言ったいいんだろかね。」

C「ぼくだったら、いつまでも言わない。その子犬が  
幸せになって、死んでしまうまでぜったいに言わな  
いな。」

C「あのね、その子犬が一人前になってね、大人にな  
ったときに、ゆりさんに言えたいの。」  
C「ビスと子犬が死んでしまっからじゃなければ、  
言っちゃいけないの。」

C「その子犬がね、一人前になった時に言う。」  
C「やっぱり大きくなって言わないで、心の中で言  
えはいいと思います。」

C「ゆりさんが、ぼくの気持ちをわかってくれる時  
まで、言わないほうがいい。」  
C「学校から帰ってから言うの。」

C「え、そんなの。(騒然)」  
T「そうじゃないよね。」

C「やっぱり、その子犬が大きくなってから言えば、

子犬も一人前になっているし、一人でも旅ができる  
んだから、その時に言ったほうがいいと思います。」  
T「とってもよく考えてくれてありがとう。先生も、  
みんなと同じ考えです。」

※以上の授業記録は昭和四十九年十一月  
第二回・全日本小学校国語教育研究大会の席  
上、東京都代表としておこなった研究授業の  
記録を整理したものである。

なお対象児童は、東京都港区立南海小学校・  
二年一組・久保田学級の児童をおかりした。

### 七、板書記録

